IS <インフィニット・ストラトス>　テンプレ転生者が逝く！

時雨-トキアメ-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　＞インフィニット・ストラトス＜　テンプレ転生者が逝く！

【Ｎコード】
Ｎ３４１０ＢＡ

【作者名】
時雨ートキアメー

【あらすじ】
ある日俺は死んだ。しかし、それは神が寝てたせい？その涎で死んだ？超テンプレ乙。転生する世界は・・・ＩＳ？そんじゃ、気軽に第二の人生、歩んでいきますか！
作「こんな超テンプレ小説ですが、よろしくおねがいします。」

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　転生者が逝った。（前書き）

処女作ですので、あしからず。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　転生者が逝った。

Ｓｉｄｅ　？？？

何も・・・見えない。

何の・・・音もしない。

いるのは自分だけ？

目は開けているはずなのに。

耳はあるのに。

ここは・・・どこだ？

俺は・・・俺は・・・

俺は誰だ？

頭が痛い。なぜか、思い出すことをまるで拒絶しているかのようだ。

っ！？なんだ！？急に光に包まれた！？

あぁ・・・なんだか・・・夢が覚めるようだ・・・

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ　神

Ｚｚｚ・・・Ｚｚｚ・・・

「神様！起きてください！１日に何時間寝るんですか！」

ハッ！？・・・なんだまだ２時間しかたってないじゃないか。（天界での１時間は地上での１日）

もっかい寝よ・・・Ｚｚｚ・・・

「起きろ」

スパァン！

「痛てえじゃねえ・・・・・か・・・・・。アレ？最高神サマ？」

「減給」

「嘘だああああああああああああああ！」

どうやら仕事中に寝てたらしい。

さっき最高神様が起こさなかったら後１時間くらい寝てたかもしんねー。

さて、書類整理してくる・・・か・・・・あ。

あれ？書類涎でぐっちゃぐちゃだよ？あれ？

「お前の涎で1人の人間の命がヤバい」

まじすか？まぁいいか。どうせモブだろ？モブ。

「と思っているだろうが、その人間はのちに月へのエレベーター作る大天才だったぞ」

・・・・・・・・え？けっこう重罪？俺。

「そいつには申し訳ないからお前が土下座してからどっかの平行世界に転生でもさせておけ。あと減給。」

2度と仕事中に寝ないと誓った俺だった。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□
■□■□■

Ｓｉｄｅ　？？？

夢から覚めて、目をあけると――――――

「すんませんでしたああああああああああああああああああ！」

―――――――――土下座して謝ってるじじいがいた。

「え？ちょ、なにやってるんですか！？と、とりあえず顔をあげてください！」

「いや、本　当　に　すんませんでしたあああああああああああああ！」

え？

「俺のせいで殺してすんませんでしたあああああああああああああ！！」

え？死んだ？俺が？このじじいのせいで？

ブチッ♪

「てめえええええええええええええええええええええええええええええ！！！」

バキッガスッガスッガッガッギチチチチッ

「ア――――――――――ッ！？」

――――――――――――しばらくお待ちください――――――――――

「ふぉ、ふぉんとふに、しゅみましぇんした――（ほ、ほんとうに、すみませんでした）・・・・」

なんかこのじじいに殺された。

とりあえず、ちゃんと謝れてないから・・・

「あぁん？」

「ひぃ！す、すいませんでした！」

よし。合格。

「はぁ。んで？なんで俺死んでんの？」

「あー、そのーですね・・・」

「あぁ？」

「自分が誕をあなたの寿命の書類に垂らして殺してしまいました☆てへっ☆」

コイツ・・・

「とりあえず、俺が死んだのはお前のせいでいいんだな？死因は？」

「これからあなたの記憶を映像化して見てみる予定です。」

ほう。じゃあ回想。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□
■□■□■

Ｓｉｄｅ　前世の俺

俺の名前は風斬優斗。

今は学校にいるんだが、正直言って楽すぎる。

お、もうすこしで終わるな。

キーン　コーン　カーン　コーン

あー。やっと授業終わったよ。

あ、そういやＩＳの発売日今日じゃん。帰りに買っていくか。

――――移動中――――――――

ふう。なんとか買えたな。なんか書店にめっちゃ変な液体あったけど。

さて、家に帰るか。

あれ？あのガキ、なに車道で突っ立ってんだ？

て、おい！車来てんぞ！

「おい！何突っ立ってやがる！」

ドンッ

はぁ、どうやらガキは助けられたようだ。俺が犠牲になって・・・。

あーあ。まだＩＳ見てないのに。

あ、あの論文書きかけじゃん。

はぁ。俺の人生後悔だらけだよちくしょー

ガンッ！

めのまえが　まっくらになった！

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ　風斬優斗

お。名前は思い出せたようだ。

どうやら俺の死因はガキを庇って車に轢かれて死んだようだ。

まともな死にかたでまだよかったわ。

窒息死とかだったら洒落にならなかったわ。

「で？俺はこれからどうなんの？」

テンプレ通り転生？

「その通りです。」

え？俺声に出してないよね？

「あ、すいませんね。勝手に心を読んで。で、ですね。特典を付けてあなたは転生させます。」

超テンプレ！

「おれはどこの世界に転生するんだ？」

「ああ、そうですね。ＩＳの世界です。」

ＩＳ？まじか。

「んじゃぁまずはＩＳを動かせるようにしてくれ。それと、剣の才能をくれ。」

「剣の才能・・・ですか？どんな才能を？」

「んーじゃぁＦＦのセフィロスと同じ剣の才能を。」

「はいはい。ほかには？」

んー悩むね。じゃぁあれかな？

「じゃぁ、ＩＳを作らせてくれ。あと瞬間記憶能力をくれ。」

ＩＳの中にモンハンの武器いれたいなぁ。

「ほいほい。んじゃぁこっちきてください」

どうやらＩＳを作れるようだ。

さて、どんなＩＳにしようか。

装備は、モンハンの太刀と短剣にしようかな。出来るだけ多くの拡張領域（バススロット）を空けとかないと。

防具は・・・衣みたいなのでいいか。耐熱性の。

太刀が当たんないと意味ないから機動力重視のＩＳにしよう。

――――――――――3カ月後――――――――――

出来たぜい。これが俺のＩＳ『片翼』だ。起動するとちゃんと翼もでる。半分だけど。後、白いけど。

あとはこれを待機状態にして・・・っと。

「神ーできたぞー」

「はぁ、よくこんな接近戦オンリーなＩＳで戦おうと思いますね。あれですか？一夏に憧れでもあるんですか？」

一夏？ああ、一夏ね。もげろ。

「んじゃぁ、そろそろ転生してくるわ。」

「そうですか。それでは。◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆・・・っと。後ろのドアからどうぞ。」

後ろを見ると白いドアが出来ていた。これから始まるのか。

「じゃぁなじじい。世話になったな。」

「いえいえ、それではまた、縁があったら、またお会いしましょう。」

いいじじいだったな・・・。

ガチャッ

あれ？地面がないよ？

「このクソじじいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいい！！」

「HAHAHAHAHA！やられたことはやりかえす！それが俺ク
オリティー。」

「覚えてろよおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉ・・・・・」

また会ったら生きることを後悔させてやる！

主人公設定

主人公　風斬優斗（♂）　１６歳

寝ていた神の涎で殺されたかわいそうな人。

前世では月へのエレベーターの論文を書いていた天才。

前回扉を開けたら地面がなかったでござるで落下する。

両親はいない。しかし、ＡＴＭに金があった。（超ご都合主義）

原作のキャラ達に面識はない。

神から転生する時に能力をもらった。

１ＩＳが動かせるようにする。

２剣の才能をもらった。（ＦＦのセフィロスなど、剣を使うキャラと同じ技が出せる。虚空とか。）

３瞬間記憶能力をもらった。

４ＩＳを作れる。（けど、これ以上作る気はない。）

ＩＳ名：片翼

言わずと知れたセフィロスの２つ名のこと。（天使を入れるとなんか合わない。）

普段は羽の形をしたペンダントになってる。

起動すると、背中からスラスターの代わりに白い翼が出る。

片方だけでも飛べる。でも武器を一つに封印するか、シールドエネルギーを２００減らすと複数枚展開できる。

＜武器＞

☆太刀

王牙刀【伏雷】　モンハンＭＨＰ３より。雷属性の太刀と言ったらこれだね。当て続けると麻痺る。

リーチ――中　雷属性　振りの速さ――普通　【５０】

凶刀【催花雨】　こちらもＭＨＰ３より。嵐龍アマツマガツチの剣。基本これで戦う。

リーチ――短～中　水属性　振りの速さ――やや早い　【６０】

天上天下天地無双刀　ＭＨＰ２Ｇより。攻撃力ＮＯ．２（ＮＯ．１は砂猿薙【ゴゴゴ】。会心率－２０％）の刀。最強にふさわしい。

リーチ――短　無属性　振りの速さ――やや

遅い　【１００】

飛竜刀【椿】　ＭＨＰ２Ｇより。リオレウス希少種の武器。銀色でかっこいい。

リーチ――中　火属性　振りの速さ――普通　【８０】

片翼の天使　ＦＦＤＤより。セフィロスの最強武器。ゲーム内では剣の外見が変わってないので、あの長い剣とする。

リーチ――中～遠　無属性　振りの速さ――やや早い

ＥＸモード中は強制的にこれになる。　【１００】

☆短剣

劉家之剣　ＭＳより。５３Ｌｖ装備。でもＩＳにＬｖとかない。

リーチ――短　振りの速さ――最速　【６０】

投げナイフ　ＭＨより。短剣が複数出てきて投げられる。

リーチ――遠　速さ――１００ｋｍ／ｈ　１本作るのにＳ．Ｅ１０必要　【２０】

マインゴーシュ　相手の攻撃を逸らす。攻撃には使えない。

リーチ――短　【０】

アーチ　エルシャダイより。攻撃剣で使わず、ビーム兵器からの防御剣として使う。

ただし、展開時とした後毎秒１０ずつＳ．Ｅを喰うのでさっさと違う剣を展開するのが理想。

一応斬ることはできるが、攻撃力は低い。つまようじ（笑）

リーチ――短　聖属性　【１０】

シールドエネルギー量：７００（５００）

Ｓ．Ｅを２００減らすことで翼を複数枚展開できる。

単一仕様能力：ＥＸモード

通常より早く動けて、早く剣を振りぬけるようになる。（例：虚空が８ＨＩＴから１６ＨＩＴに）

八刀一閃や獄門、天照などをこの状態にあてると、ガードクラッシュする。

この機体が他のＩＳと違う点

１当たっただけでは相手のＳ．Ｅを減らすことができない。その代わりに、剣に相手に与えたＳ．Ｅ分の攻撃力が与えられる。

２蓄えた剣の攻撃力を開放させるには、特別な技（八刀一閃、天照、獄門、鬼人斬りなど）を当てる必要がある。

３特別な技を使った後、剣の攻撃力は元の攻撃力に戻る。（武器名の横の【】の中の数字）

４この機体は、反重力なんとか～とかそういうので浮いているのではなく、ＦＦＤＤのアビリティーのマルチフリーエアダッシュで動いたり、浮いていたりしている。

主人公設定（後書き）

主人公のプロフィールです。

最初ＦＦＤＤのシステムをどのように組み込もうと思いましたが、結果このような形になりました。

一応ＦＦＤＤのセフィロスさんの技

・なぎ払い
・刹那（切り上げ）
・縮地
・居合切り
・神速
・虚空
・シャドウフレア
・八刀一閃
・閃光
・天照
・獄門

この中で使うのは、

・縮地
・刹那
・虚空
・神速
・八刀一閃
・閃光
・天照
・獄門

です。

第一話　テンプレ転生者が落ちた。

前回のあらすじ

・俺、死んだ。

・神をボコボコにした。―（主従関係を結んだ）

・能力をもらった。

・神に仕返しされた。復讐してやる。

Ｓｉｄｅ　風斬優斗

あのクソ神め・・・。下見たら一面海じゃねえか・・・。

ってかこの高さから落ちたら死ねる。第二の人生始ってすぐ死ぬとか嫌だよ！？

なんかないか・・・？なんか・・・こう・・・飛べるの・・・。あっ。

ＩＳ使えばいいんじゃん！―（アラスカ条約のことをすっかり忘れています。）

そうと決まれば、さっそくＩＳを起動させて・・・

「こい！『片翼』！」

バサッ！

「おぉう・・・なんか不思議な感じがするな・・・。片方の翼で飛んでるって。」

とある魔術の禁〇目録のていとくんみたいなメルヘンヤローの気持ちがわかる気がする。

「さて、飛べたはいいんだが、ここはどこだ？太平洋の真ん中だったら泣けるなぁ。ん？近くに学校みたいなのがあるな。ちょっと近づいてみようか。何人かＩＳ起動させてるし。」

善は急げっていうし。さっさと行くか。

Ｓｉｄｅ　織斑一夏

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、

オルコット。試しに飛んでみせろ。」

俺の名前は織斑一夏だ。なぜだか知らんが世界で唯一ＩＳを動かせる男子・・・になってしまった。

俺は今日もこうして鬼教官こと千冬姉の授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

っといろいろ考えてたら展開してなかったか。展開するには集中して・・・

（来い、白式）

と、心の中で呟く。刹那、右手首から全身に薄い膜が広がっていくのがわかる。

約０．７秒か。まぁ、そんなもんだろう。隣のセシリアはもうＩＳを装備させて浮いている。

「よし、飛べ」

言われて、セシリアはすぐ急上昇し、遥か頭上で静止する。

俺も後に続くが、その上昇速度はセシリアよりもかなり遅いものだった。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

そりゃぁセシリアは代表候補生だ。ＩＳの起動時間が俺と比べて天と地の差ほどある。

しかし、『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』ってなんだよ。もう少しわかりやすくしてほしい。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなぁ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ？これ」

飛行機と同じ原理では飛んでないらしいが・・・。大体、翼の向きと関係なく好きに飛べるんだから、ますます訳がわからない。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

すぐさま断る。絶対俺の頭じゃ理解できない。

「そう、残念ですわ。ふふっ」

あの試合一（決闘）以来から何かと理由をつけて俺のコーチを買って出る。それは非常にありがたいし、セシリアはさずがに代表候補生だけあって優秀だった。

しかし、いったいどうゆう心境の変化なんだ？あの時の態度とは全然違う。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導させてさしあげますわ。そのときは二人きりで――――」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

っと、箒から怒鳴り声が。横で山田先生がインカムをとられておたおたしていた。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から１０センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

と言ってすぐさまセシリアは地上に向かう。

「うまいもんだなぁ」

そしてどうやら完全停止も難なくクリアーしたらしい。――よし、俺も行くか。

意識を集中。背中の翼状の突起からロケットファイアーが噴出しているイメージを思い描く。

ギュンッ――――――ズドォォンッ！

地上に”は”ついた。ただし、”墜落”という形で。

体はGや衝撃から守られているが、心が瀕死状態だった。できれば心も守ってほしかった。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴をあけてどうする」

「・・・・・すみません」

「お、織斑先生！織斑先生！」

ん？山田先生が急いで千冬姉のところにきた。どうしたんだ？

「すぐそこでＩＳの反応が！」

「何！？だれがそんなことを！？」

「それが・・・登録されていないコアなんです・・・」

「ふむ・・・では私たちが調査をしに行こう」

「わかりました！では先生を集めてきます！」

・・・どうやら正体不明のＩＳが海上に現れたようだ。

――――――男だったら、いいなぁ。

Ｓｉｄｅ　風斬優斗

む、どうやらこのＩＳに気づいたようだ。ひょっとしたらこのまま
ＩＳ学園に入学とか出来るかもしれんが・・・。

「とりあえず隠れるために近くの森に逃げるか」

ここで捕まってＧｏ　ｔｏ　刑務所とかは死ねる。故に俺は逃げる！

「おい、そこのＩＳ！とこで止まれ！」

――――――アレ？もう来たんですか？

「ちょ、ちょっと待ってください！攻撃するつもりはありません！」

何あの剣。俺の剣と違って太すぎるだろ・・・

「では、なぜここでＩＳを展開した？」

やべっなんて答えよう・・・空から落ちてきました。とか言ったら頭のおかしい人間かと思われる・・・

どうする？コマンド？

しんじつをつげる

うそをまぜつつせつめいする

にげる↑

優斗は　逃げだした　！

「逃がすか！」

しかし、まわりこまれて　しまった　！

「はぁ、わかりました。わかりましたからブレードを首に当てないでくださいめちゃくちゃ怖いです」

囲まれた瞬間に首にブレードをかけられた・・・

「ちょっとこのままだと説明できないんで、着陸してもいいですか？」

「ふむ・・・それくらいならいいだろう。ただし、しっかりと説明しろ」

よかった。ダメって言われてたらここでＩＳ解除するしかなかった・・・。

「では、ついてこい」

「さて、貴様の望み通り着陸させてやったぞ。説明してもらおう。」

はぁ、結局こうなるのか。

「わかりました。では・・・」

スッ―（ＩＳを解除する音）

「！？・・・男だと！？」

「ええ、男です。」

ここで嘘を混ぜて説明すれば・・・

「実は、このことがある研究者にばれたんで、ＩＳを使って逃げていｔ「嘘だな」・・・なぜですか？」

「では、なぜＩＳをもっている？なぜ遠くに行かなかった？」

くっ、やっぱりそこか。・・・正直に話すか？頭がおかしいと思われるが。

「・・・はぁ、わかりました。正直に話します。」

俺は話した。神によって殺されたこと。その代わりにこの世界にやってきたこと。そこでこのＩＳをもらったこと。―（嘘）

「にわかには信じられない話なんだが・・・。まぁ、いい。それで？このあとどうするんだ？」

「俺は・・・そうですね。行くあてもないですね。」

「なら・・・ここに入学すればいい」

は？こんな頭がおかしいと思われてる俺を入学させる？

「・・・いいんですか？」

「ああ。特にもう一人の男は歓迎するだろう。」

そんなこんなで俺はＩＳ学園に入学することが決まった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第一話　テンプレ転生者が落ちた。　（後書き）

長すぎたっ！無駄に長すぎたっ！

次回はテンプレ転生者が入学した。をお送りします。

第二話　テンプレ転生者が入学した。（前書き）

明日受験なのになにしてるんだろう・・・。

第二話　テンプレ転生者が入学した。

前回のあらすじ

・扉を抜けたら、そこは大海原だった。

・ＩＳ初起動。

・ＩＳ学園に入学する。

◇

Ｓｉｄｅ　風斬優斗

ここがＩＳ学園か。アニメとかでみるよりもずっとでかいな。

ああそうだ。俺が自分のことを千冬さんに話した後に、俺の（捏造された）人生を政府に話したんだが、

※具体的にはあとがきをご覧ください。

「捨てられたのか！？親父にも捨てられたことがないのに！」

とか当たり前のことを言ってる馬鹿とか、同情をしてくれる人がいたので、

「気にしないでください」

と、満面の笑顔で言うと何故か全員顔を赤くして俯いてしまった。

はて、何故だ？

俺は別に一夏のように鈍感でないんだが、顔を赤くする意味がわからない。

作：顔はキラ・ヤマトに似ていて、神に「仕返しだ！」と言われた

ときにニコポを付けられて転生しているからだよー

？電波が飛んできたんだが、とりあえず神を殴りたくなった。

神：理不尽だあああああああああああ！

閑話休題。

さて、現実逃避はこれくらいにして。さっさと教務室に行かないとな。

Ｓｉｄｅ　織斑一夏

今日の教室はなぜかいつもより騒がしい。いったい何があったんだ？

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生と転入生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「代表候補生か・・」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

断言できる。それはない。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

箒もそんな事言っているが、気になっているのだろう。窓側の席に居たはずなのにいつの間にかここにいるからな

「いや、転校生はこのクラスじゃないけど、転入生はこのクラスなんだってー」

転入生はこのクラスね。

「どんなやつなんだろうな」

「む・・・気になるのか？」

「ん？ああ、少しは」

「ふん・・・」

質問に素直に答えたら、なぜか箒の機嫌は悪くなった。
なんだろう、最近やたらと機嫌が良かったり悪かったり、忙しい奴だ。情緒不安定なのか？

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう！」

なぜか急にセシリアがやる気を出し始めた。お前も情緒不安定なの

か？

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとみんなが幸せだよー」

セシリア、箒、クラスメイトが口々に好きなことを俺に言ってくる。そうは言われても、ここ最近はＩＳの基本操縦でつまずいていて、とてもじゃないが自信に満ちた返事は出来ない。
ちなみに、何故クラスみんなが幸せになるかと言うと、クラス対抗戦で一位になると優勝商品として学食デザートの半年フリーパスが配られる
どおりで女子が燃えるわけだ。

「織斑くん、頑張ってねー」

「フリーパスのためにもね」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「その情報――――――古いよ」

ん？教室の入口の方からふと声が聞こえた。
なんか、すげえ聞いたことのあるような声なんだが・・・。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴・・・？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなっ・・・！？何てこと言うのよ、アンタは！」

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！

鈴に痛烈な出席簿打撃が入る
千冬姉の登場だ

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません・・・・」

さっきまでの態度はどこにいったのか。
その態度は１００％千冬姉にビビってる。こいつ、昔から千冬姉苦手だな。なんでか知らんが。

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

２組に向かってダッシュ。うん、昔のままの鈴だな。
しかし、なんでアイツは格好付けてやってきたんだ？高校生デビューか？

「っていうかアイツ、ＩＳ操縦者だったのか。はじめて知った」

そう素直に思って、なんとなく口に出した。・・・それがまずかった。

「・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな

？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で――――」

そのほかにクラスメイトからの集中砲火。ああ、馬鹿――――

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿ども」

千冬姉の出席簿が火を吹くぜ！ハッハァー！

バシン！

「早く座れ」

「すいませんでした」

◇

「今日はこのクラスに転入生が入ってくる」

お、本当に転入生が来るのか。

「いいぞ、入れ」

ガラッ

千冬姉がそういって入ってきたのは――――――――

「はじめまして。風斬優斗といいます。今日から1年間、よろしくお願いします（微笑み）」

――――――――男だった。

「きゃっ」

「きゃっ？」

あ、このパターン知ってる

早く耳をふさがないと！

「「「「「「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」」」」」」

おぉう、耳をふさいでも衝撃が・・・。
窓が割れてるぞ、声で。

「来た！2人目の男子！」
「話し方が丁寧だし、超美系！」
「まるで天使の微笑み！」
「地球に生まれてよかったーーー！」

「あーうるさい。静かにしろ」

千冬姉がそういうとそう言うと一瞬で静かになった。
ってか転入生が苦笑いしてるぞ。

「では風斬、あの窓側の空いてる席に座れ」

「はい、わかりました」

しかし、もう一人男でＩＳが起動出来るのがいて助かった。
このままだったらストレスで胃に穴が開くところだった・・・
男同士だし、仲良くしないわけないな。あとで話にいこう。

◇

Ｓｉｄｅ　風斬優斗

「はじめまして。風斬優斗といいます。今日から1年間、よろしくお願いします。（微笑み）」

っと、まぁこんなもんでいいだろう。すぐそこにいる一夏が驚愕の顔をしているな。

・・・なぜだ？悪い予感しかしない。この後何が起こるんだ？

「きゃっ」

”きゃっ”ってなんだよ。傷つくぞ？

「きゃっ？」

あ、やばい思い出した。このパターンは女子の声で衝撃波が来るパターンだ。
早急に耳を塞がないと・・・

「「「「「「「「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」」」」」」」」

うぉ、すげえ衝撃波だぜ・・・。そこの窓、割れてるぞ？

「来た！２人目の男子！」
「話し方が丁寧だし、超美系！」
「まるで天使の微笑み！」
「地球に生まれてよかったーーー！」

は？俺が美系？一夏の方がイケメンだろＪＫ。
天使はだいたいあってる。俺自体天使みたいなもんだしな。

「あーうるさい。静かにしろ」

！？一瞬で静かになった！？軍隊か、ここは？
思わず苦笑いをしてしまったぞ（笑）

「では風斬、あの窓側の空いてる席に座れ」

ふむ、あそこは布仏本音さん、通称”のほほんさん”の隣だな。

「はい、わかりました」

チラっと一夏の方を見ると、安堵している顔だった。
どうせ”このままだったらストレスで胃に穴が開くところだった”
とか思ってるんだろうな。

なにはともあれ、やっと第二の人生、開始！

第二話　テンプレ転生者が入学した。（後書き）

※捏造話の要点

・生まれて間もなく親に捨てられた。

・とある会社に保護された。

・その会社はＩＳを作っている会社で、ＩＳに触れたら反応して、会社の人たちが自分を捕まえようとして、逃げてきたところを千冬に保護された。

・専用機はコアを篠ノ之束から千冬経由でもらい、そこから自分で作った。

こんなかんじですかね。特に面白みのない話です。

明日は受験なので、今日の更新はこれだけです。

では次回、テンプレ転生者が模擬戦をするようです。

第五話　テンプレ転生者が模擬戦をするようです。（前書き）

受験？なにそれおいしいの？状態だったけど、やっぱり勉強は必要だね！

第五話　テンプレ転生者が模擬戦をするようです。

前回のあらすじ

・ＩＳ学園入学。

・原作通り進む。

・自己紹介。

◇

Ｓｉｄｅ　風斬優斗

やぁ、おはこんばんちは。優斗です。

自己紹介のあとのほほんさんに渾名をつけられました。

「ゆーくん」らしいです。なんで渾名？

して、今は授業中。なにやら一夏Ｌｏｖｅｒｓは考え事をしているようです。

「篠ノ之、答えは？」

「は、はい！？」

・・・織斑先生の前で考え事とは、なかなかやるじゃないか。

「答えは？」

「・・・き、聞いていませんでした・・・」

「はぁ・・・。では、オルコット」

「・・・例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な・・・」

バシーン！

さっきから織斑先生の出席簿が火を噴いてます。ヒャッハー！
２人とも青春してるね。・・・想い人はＳ級の鈍感だけど。

◇

授業が終わって、俺は一夏のところに行った。

「「お前の（あなたの）せいだ！（ですわ！）」」

「なんでだよ・・・」

一夏Ｌｏｖｅｒｓが一夏に文句をいってるようだ。うん、原作通り。
っていうかなんでこんなにアプローチされてるのに気付かないんだよ・・・
もげろ。３秒で２回くらいもげろ。

「んーっと、織斑君であってるかな？」

とりあえず最初から一夏っていうのもなんだし、転入生らしくしてみる。

「おう、俺は織斑一夏。一夏でいいぜ」

どうやら名前を呼ぶことを許可してくれたようだ。
なんか視線だけで殺されそうなくらい見られてる・・・

「じゃぁ、俺のことも優斗でいいよ」

「おう。よろしくな、優斗」

「うん、よろしく」

「「私たちの話はまだ終わってないぞ！（ですわ！）」」

おおう、耳が・・・ッ！

「まぁ、話ならメシを食いながら聞くから。とりあえず学食いこうぜ。」

「む・・・ま、まぁお前がそういうなら、いいだろう」
「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

まったく、この2人は。どうみても一夏のことが好きってわかるじゃないか。

「素直じゃないなぁ（ボソッ）」

「「！？」」

「え、聞こえてた？」

もちろんわざと。

「な、なぜわかるんだ！？（ボソッ）」

「ど、どうしてそのことを！？（ボソッ）」

「いや、どこからみてもわかるよ？（ボソッ）」

絶対。

「おーい、どうしたんだ？」

「「「今行く！（よ）（行きますわ）」」」

◇

「待ってたわよ、一夏！」

ドーンと俺たちの前に立ちふさがったのは噂の転入生、凰鈴音だった。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

一夏は冷静に対処しているね。ってか、わかんないの？なんで待ってたか。

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

そして、一夏たちと俺は食券を食堂のおばちゃんに渡す。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ・・・」

照れ隠しにきまってるだろう。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！一夏さん？注文の品、出来てましてよ？」

すげえおおげさだなぁ。

「むこうのテーブルが空いてるね。いこう」

さりげなくここでテーブルを確保しないと。

それからすぐテーブルにつけたのは僥倖といえば僥倖だった。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ・・・」

「そうだぞ。なんでそんなはなしになるんだ。ただの幼馴染だよ」

馬鹿なのか？もはや呆れを通り越して感動するね！このＳ級鈍感！男の敵！

「・・・・・・」

「？何睨んでるんだ？」

「な、なんでもないわよ！」

もう・・・すごいね一夏君！思わず殺意に目覚めそうだよ！

「はぁ、やっぱりこうなるのか」

俺がため息をつくと、

「一夏、この人だれ？」

この人扱いされた・・・

「ああ、世界で２人目のＩＳを動かせる男子の風斬優斗だ」

「どうも。」

「へぇ・・・まさか２人もいるなんてねぇ・・・」

ありがたきしあわせ。

「はぁ、また一夏の毒牙にかかった女子が１人・・・」

俺の呟きは周りの声でかき消されてしまった。

「なんでわかったの！？」

――――――１人を除いて。

◇　（オリ展開）

さて、今日の最終授業はＩＳを使った戦闘だそうで。

「そういえば優斗はＩＳ持ってんのか？」

「ん、ああ。一応持ってるぞ。どうする？模擬戦でもするか？」

「そうしようか」

という訳で織斑先生にいってみたらＯＫもらったので、一夏と模擬戦をすることに。

「んじゃぁ一夏、いくぞ。『片翼』、展開！」

「おう。来い！白式！」

バサッ

「な、なんなんだ・・・それ・・・？」

「このＩＳの名前は片翼。防具を耐熱性の衣に変えたことによって、絶大的な拡張領域（バススロット）と機動力、攻撃力を追求したＩＳだ」

今ここに　天使ＶＳ白が始まった。

「いくぞ一夏！展開！『凶刀【催花雨】』！」

まずは牽制に・・・

「【神速】！」

ズバババッ！

「「「「「「「「「「「「なっ！？」」」」」」」」」」」」

「おいおい、どうなってるんだ！？剣で遠距離攻撃！？」

驚くのはわかる。しかし・・・

【白式、ダメージ０。シールドエネルギー残量、５６７。実体ダメージ、無。】

「「「「「「「「は？」」」」」」」」」

「・・・どういうことですの？攻撃は当たったはずですわ・・・」

その疑問はもっともだ。だからちゃんとこのシステムを教えよう。

「お答えしよう。このＩＳは”基本的に”相手にダメージを与えることはできない」

「「「「「「「「はあああああああああああ！？」」」」」」」」」

ですよねー。そうなるよねー。

「まぁ、まて。ちゃんと話を最後まで聞け。それで？どうやって相手のシールドエネルギーを減らすんだ？」

千冬さん、静めてくれてありがとう！

「実は、このＩＳには”ブレイブ攻撃”というものと”ＨＰ攻撃”という２つの攻撃方法がある。ブレイブ攻撃では、相手にダメージを与えることはできない。しかし、攻撃が”当たった”ということが確認された場合、本来相手にいくダメージが、剣の”追加攻撃力”となる。例えばこの凶刀【催花雨】なら、最初は６０だが、本来一夏に与えるダメージ分５０が追加され１１０になっている。」

「それで？その溜まった攻撃力はどうするのよ？」

言い質問ですね！（池上昭風）

「そこで”ＨＰ攻撃”を使う。ＨＰ攻撃は、剣に初めからある攻撃力を開放するのと、追加された攻撃力も合わせて相手に与えることができる攻撃だ。」

「それは永続的なのか？」

「いや、それはない。ＨＰ攻撃が当たったとき、すなわちダメージを与えたときに剣の攻撃力は元の基本値に戻る。」

まぁ、”ＥＸ”についてはまた今度でいいだろう。

「とまぁこんなところだ。織斑先生、続けてもいいでしょうか」

「ああ、構わん」

――――――――試合再開――――――――

「んじゃぁ一夏からいいぞ。」

「オーケー。んじゃぁ、お望み通りっ！」

ふむ、白式の『零落白夜』か。自分のＳ．Ｅを攻撃力に変換してあいての絶対防御を強制的に発動させる単一仕様能力か。

ここは『アーチ』を一瞬だけ展開させて・・・

「展開！『アーチ』！」

ガキィィン！

「な！？俺の『零落白夜』に競り合ってる！？」

「本来ビーム兵器に対抗するもんだが、なんとかなったか・・・。Ｓ．Ｅが異常なほど早く減る・・・がっ！」

ふう、逃れたか。

「次はこっちだ！展開！『劉家之剣』！」

「あれは・・・？あたしの双天牙月！？いや、でも色が全然違う・・・」

「いくぞ一夏！『スキル選択』【ブーメランステップ】！」

フォンッ！シャッシャッ！

「くっ、なんだその攻撃っ」

【白式、ダメージ６０。シールドエネルギー残量、５０７。実体ダメージ、小】

「続いて『スキル選択』【アサルター】！」

シャァァン！

【白式、ダメージ６０。シールドエネルギー残量、４４７。実体ダメージ、小】

「っく！連続攻撃！？ヤバい！次が来るっ！」

「展開！『凶刀【催花雨】』！」

「？戻した・・・？」

「よし一夏、いまから”俺の単一仕様能力”を見せよう！発動！『ＥＸモード』！」

「「「「「「姿が変わった！？」」」」」」

俺のＥＸモードの外見は、ＤＬＣ１セフィロスのＥＸモードで、背中に６枚の白の翼が生えてる感じだ。

「いくぞ！展開！『片翼の天使』！はあああああああああ！」

「こい！優斗！」

「【虚空】！」

ズガガガガガガガガガガガッ！（１６ＨＩＴ）

「え？いつの間に後ろに・・・？」

鈴の言う通り、俺は虚空を使った瞬間　（・・・・・・・・）に後ろに抜けた　ように見えた（・・・・・・）。

「いや、鈴、違うな。あいつは一夏の横を瞬時加速で抜けた瞬間に１６の太刀を浴びせた」

「じゅ、１６！？それって人間なの！？」

うん、だって俺生きてるチートだもの。

千冬さんだって俺が思ってることがわかってるようでうなずいてるし。

「一夏、終わりだ。【神速】！」

「くっ、まだだ！それだけでシールドエネルギーは減らない！「そうだな。だから俺はこうする」んなっ！」

俺は瞬時加速をつかって神速をくらってる一夏を剣で下に落とした。

「ガハッ！」

【白式、ダメージ２７。シールドエネルギー残量、４２０。実体ダメージ、大】

「終わりだ。【獄門】。」

ズドォォォン！

――――――――――白式、ダメージ８００。勝者、風斬優斗。

「一夏。俺の勝ちだ。」

「・・・ああ。俺の負けだ。」

初めての戦闘は、俺の勝ちに軍配が上がった。
よくわからんが、すごい歓声が聞こえた。俺はその時恥ずかしくなった・・・

「ふふっ、面白いこととしてるじゃない？風斬優斗君っ」

――――――――だから、2年のある人がこの試合を見てるなんて、気がつくはずがなかった。

第五話　テンプレ転生者が模擬戦をするようです。（後書き）

設定で書いてない『スキル選択』についての説明。

スキル選択・・・ＭＭＯゲームのＭＳにあるスキルが発動できる。

短剣の場合は、ローグ、シーフ、マスターシーフ、シャドーから、

太刀の場合は、ファイター、ソードマン、ナイト、ヒーローから選べる。

今回使ったスキル

・ブーメランステップ　通称”ＢＳ”

高速で相手に向かって一度斬り、戻ってくるときにまた一度斬る。

コンボ・・・ＢＳからアサルター。ＢＳからサベッジスタブなど。

・アサルター

相手に向かって居合切り。一度で２回当たる。

基本的に繋ぎ役として使われる。

こんなかんじですかね。

最後に2年のあの人が出ました。これの為にこの話を作ったも同然です。

ではまた次回、テンプレ転生者がつけられる。と

テンプレ転生者とトーナメント　を、お送りします。

第６話　テンプレ転生者がつけられる。～そしてトーナメントへ～（前書き）

６話と７話に分けようと思いましたが、そうすると６話短ッ！ってなったので合体させました。

第６話　テンプレ転生者がつけられる。～そしてトーナメントへ～

前回のあらすじ

・一夏Ｌｏｖｅｒｓ（笑）

・一夏と模擬戦。

・最後に不穏な予感。

◇

「ああ、風斬君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「？」

模擬戦の後、放課後になって帰る準備をしていたら山田先生に呼ばれた。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「え？俺の部屋って決まってないんじゃぁ・・・」

「そうなんですが、事情が事情なので・・・」

そう。俺は急にＩＳを動かせる男子としてテレビで報道されたのだ。あの天災ウサギめ・・・今度会ったらブン殴ってやる。

「あ、でもでも、織斑君と同じように１人部屋です！」

「はぁ・・・。それで、荷物は持ち込んでもいいんですか？」

「はい、でもここは学校ですからね。趣味の物ならいいですよ。じゃぁ、時間を見て部屋に行ってくださいね。」

と言って山田先生はどこかに行ってしまった。

◇

「酷くこざっぱりしてるうううううううううううう！」

これが部屋に入った俺の第一声。
まじでなにもない。小説に埋もれる生活の実現の為に本を買ってこよう。
なぜかＡＴＭに金が月に１００万ずつ入ってるし。
神ＳＵＧＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！

「とりあえずシャワーを浴びて寝よう」

その日はすぐシャワーを浴びて眠た。

◇

あーたーらしーいあーさがきた。
きぼーうのあさーだ。

「喜びなんて一つもないがな」

朝起きたら「知らない天井だ・・・」ってつい言っちゃったよ！

「っていうか5時って早すぎだろう・・・何しよう？」

こういうときは鍛錬するのが鉄板だね！神にプライベートチャンネル届くかな？

”神、聞こえたら返事してくれ。”

・・・さすがに無理か？

”ほいほい、なんだ？ご丁寧にチャンネルまでつなげて。”

”おお、届いたか。実はな、剣がほしいのよ。剣。用意できない？”

”んー剣か。どんな剣がいいんだ？”

”『片翼の天使』の模造品みたいなのない？”

”あるぞ”

”んじゃぁ、それ送ってくれない？あとできたら耐久と防御が異常なＩＳを作って送ってくれると助かる。”

”いいぞ。んじゃぁ・・・◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆・・・よし、そっちに箱が行ったはずだ。”

”サンキュー。”

というわけでＩＳ学園の近くにある森に来ました。

「なになに・・・ＩＳ名『グラビモス』？そのまんまかよ・・・まぁいいか。
フルスキン型、そしてスタンドアローンね。・・・やっべぇ、来週にこういうＩＳが襲撃するんだよな・・・」

そう、来週はクラス対抗トーナメントがあるのだ。

「まぁいい。それじゃぁ鍛錬開始するか・・・。『片翼』部分展開！」

部分展開・・・ＩＳの一部だけ展開する。今はハイパーセンサーと腕を展開している。

「やぁぁぁぁぁぁ！」

キィィィィン！ズァッズァッ！

【グラビモス、ダメージ１００。Ｓ．Ｅ残量、５０００。】

５０００！？いくら攻撃手段がないといっても５１００はやりすぎだろ・・・。

「フンッ！ハッ！」

ガッガッ！

「てええええええええええい！」

ガガガガガガッ！

「スゥゥゥゥゥラアアアアアアアアアアアアアッシュ！」

ズザアアアアン！

【グラビモン、ダメージ１４２８。Ｓ．Ｅ残量、３５７２。】

「はぁ・・・はぁ・・・ふぅ、今はこんなもんか」

セフィロスの技量をもってもまだ１５００も減らしてねえぞ・・・。

神よ、堅すぎやしませんか！？

こんなＩＳで大丈夫か？

”大丈夫だ、問題ない。”

”一番いいの（常識）を頼む”

◇

エルシャダイ式鍛錬が終わって、今は時計の針が７と６を指している。

しかしそんなことはどうでもよく、今俺は深刻な悩みを抱えている。

「誰かにつけられてる・・・」

そう、誰かにつけられているのだ。

まぁ、原作知識を持っているから、更識楯無ってことはわかるんだが、
神が
”逃げるなよ？絶　対　に　逃げるなよ？”
と、フラグを立ててるので、逃げようとすると何かがあるのは明白。
だから俺は、
「気にしない気にしない！」
という選択肢をとった。
◇

そういえば昨日飯を食ってなかったので食堂に行くことに。
そこには一夏がいた。遠くには鈴もいた。
そういえばこの時期だっけ。鈴を怒らせるの。
だったらからかってみようか。

「どうした一夏。まるで幼馴染の約束を忘れてビンタされてなんで
って考えてるかんじがするぞ」
「「！？」」

当てられたからって動揺しすぎだろ。
「まぁいいか。鈴、ここいいか？」
「う、うん。いいわよ。（なんであんたがそのことを！？）」
「そうか。ありがと。（え？一夏の顔をみたらそんなかんじがした
んだが？本当だったのか？）」
知ってたけどね。
「（実はあいつがあたしとの約束を覚えてなかったのよ！）」
「（ああ、あの朴念仁だからな。仕方ないとしか言えない。）」

そんなかんじで鈴に愚痴られながら飯を食った。

◇

――――――別に、授業内容を書かなくてもいいのだろう？――――――

というわけで一日が終わりました。

授業なんてなかったんや！

「さっさとシャワー浴びて飯食って寝よう。」

ガチャッ

「おかえりなさい。ご飯にする？お風呂にする？それとも、わ・た・し？」

バタン

「オーケーオーケー、なんだ疲れてるんじゃないか。きっと幻覚でも見ているんだろう。
さあ扉を開けよう！別に制服姿で俺の部屋に上がっている人なんていないんだろう！」

ガチャッ

「おかえり（ｒｙ）

「なんで裸エプロン！？なんでここにいるんですか！？」

なんでいるんだよ・・・生徒会長さんよぉ・・・

「なんでって・・・ここにいたいから？」

「どうして！？どうしてこの部屋に俺が住んでるってわかったんですか！？
あとなんで荷物があるんですか！？ここは１人部屋のはずですよね！？
そしてどうやってここのカギをあけたんだあああああ！？」

「生徒会長権限」

「おそろしい権限だな！おい！」

大抵のことは生徒会長権限でどうにかなるってすげえなおい！
プライバシーのかけらもないね！

「あと、今日からここに住むことになったから」

「どうやって千冬さんを陥落させたんだ！？」

「会長権限。」

「会長権限ＳＵＧＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！目的は！？目的はなんですか！？」

「目的？そうね、強いてあげるなら・・・」

――――――――あなたのそばに居たいから・・・かな？

「！？（不覚にもときめいてしまったぞ・・・？）」

「あはっ☆」

こいつ・・・天災以上だ・・・。

「そういうわけで、よろしくね☆」

「はぁ・・・不幸だ・・・」

「なによーそんなにわたしじゃ不満なの？」

「いや、そうわけじゃないんですが・・・」

まったく・・・不幸だ。

◇

,・　―'''''''''"""""、
(・　|　,,,,・・・　―ァァフ―
あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！
―i　i―　　〜！〜〜　／／―
―l、〜　　j〜　／,,ィ／／―　『
おれは1人で寝ていたと思ったら
i―‥！ゞ、|ノ／　u　〜‥〜／／へ
いつの間にか楯無が潜り込んでいた。』
―リ　u'　〜　　,ノ　|,,!V,ハ―
／,fト、|〜ル〜,ィ'eラ　,　タ人　な
…　何を言ってるのか　わからねーと思うが

／'　　ヾ―亠―　ﾔ'、)(、／　―＞、ﾄi、

おれも何をされたのかわからなかった…

，゛　／)、iLレ　u'　―　―　ヾlﾄﾊ＞

―／|／　ハ　!ニ⊇　'／:}　V…………、

頭がどうにかなりそうだった…

／／　二二二7' T' '　／u'　|　／…………

／、、

／'，r　―|―ｧ'　T゛'　'　〃'　／……／―'

誘惑だとか非現実だとか

／／／　广:'　／'　／………／'、

、(、そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

ノ'　／　ノ………、|―、　|　／……／／

、}

|／、、／………………………………

:'、|―{:…………イ　もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「すぅ・・・すぅ・・・」

「ど　う　し　て　こ　う　な　っ　た　」

朝起きたら隣に寝ている楯無がいた。

おかしいだろ！

「んっ・・・すぅ・・・すぅ・・・」

「グハァッ！」

ぐっ・・・俺のＲＩ☆ＳＥ☆Ｉが削られていく・・・っ！
圧倒的楯無・・・っ！
なんで妙に艶っぽい声を出すんだっ・・・！

そうして現実逃避を繰り返していた、クラス対抗戦の当日。

「んっ・・・おはょぅ・・・」

わが一生に、一片の悔い無し！（ラオウ風に）

◇

「お。おはよう優斗。どうした？酷く顔がやつれているぞ？」

「やぁ、一夏・・・。この顔はね・・・そうだな・・・戦いに勝った戦士の顔だと思ってくれ。
じゃないとあの光景を思い出してしまう・・・。」

あのときの楯無は可愛かった・・・・じゃなくて！

なんでこんなに心があの人にひきつけられてるの！？

楯無、恐ろしい子！

「そ、そうか。優斗がそういうなら、そう思っておくよ。（あとでなにがあったか聞かせてもらうぞ）」

「あ、ああ。（やめろっ！俺の理性がっ！あの光景を思い出すと理性がっ！）」

「（お前に何があったんだ！？）」

「（このＨＲが終わったら話す）」

こうして一日が始まった。

第6話　テンプレ転生者がつけられる。～そしてトーナメントへ～（後書き）

クラス対抗戦は明日に持ち越します。

最近兄が彼女との惚気話をしてきてうざいと思ったのは何度目だろう。

リア充爆発しろ。（懇願）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3410ba/

IS <インフィニット・ストラトス>　テンプレ転生者が逝く！

2012年1月12日23時49分発行